

Munkkiniemen yhteiskoulu 訪問①

文化学園大学杉並中学校 中学部長 竹越 大助

1 はじめに

私立学校教員海外研修団は、2025年9月12日、視察先である Munkkiniemen yhteiskoulu（中高）を訪問した。

当初、フィンランドで数少ない私立学校が公立学校とどのような特色を打ち出しているかという点に着目していたが、公私立の差異は日本と比べ小さいものであるとの認識に至った。そこで授業見学を通してその様子を中心に振り返りたい。

2 学校（施設）概要

1938年創立の私立学校で、教育財団（Munkkiniemen koulutussäätiö）によつて運営され、ヘルシンキ市内に位置する中等教育（7～9年生）および高等教育を提供する併設型校で、約960名の生徒が在籍している。日本の私立学校とは違い、生徒募集業務などではなく、通っている生徒も「私立」であることは認識していない場合が多いとのこと。それゆえ、在籍生徒の多くは「家から近い」ということでこの学校に通っているそうである。

教職員の給与など学校運営に関わる財源も、国から財団へ、財団から学校へという流れとなり、生徒の金銭的負担はフィンランドの公立学校と同じくゼロである。



校舎概観



朝の登校風景（AM8:00頃・右手前に駐輪場）

3 見学した授業の概観

今回の視察先の中で、最も生徒の活動の様子（授業）を見る機会に恵まれた。ここでは3つの見学した授業について紹介する。各授業について1コマの半分以上の見学ができ、見学後に授業担当者に直接質問をすることができたので、そこから分かったことも含めて共有したい。

(1) 中1 Health Education テーマ「メディアリテラシー全般」

この授業は、中学1年生21名を対象に実施された。生徒たちは、3~4名ずつ向かい合わせに着席できる少し大きめの机に着席しており、協働的な雰囲気の中で授業が進められていた。どの生徒の机上にもA4サイズの教科書、ノート、筆記具が準備され、全員が該当ページを開いた状態で臨んでいたことから、教員と生徒の間で授業における了解性が感じられた。

授業は、講義(20分)から始まり、警察が作成したSNSの危険性を啓発する動画の視聴(10分)、その後の振り返りと発問・説明を経て、再度動画視聴(10分)、最後に説明・発問・宿題の指示(5分)という流れで構成され、座席の移動やペアワークは行われず、講義主体の形式であった。授業の冒頭では、教員が一人ひとりの名前を呼び出席を確認する場面があり、生徒との関係性を大切にする姿勢を感じられた。学習は、事前に教科書を読み、簡単なワークシートを記入した状態で始まっているようで、授業中に紙の教科書を利用することはなかった。

授業で扱われたメディアリテラシーの内容は非常に幅広く、広告、個人情報保護、著作権、パスワードの利用、フィッシング詐欺、ネット依存、SNSの使い方、性的搾取など、多岐にわたるテーマが取り上げられていた。特に、問題に直面した際の対応方法については具体的な説明があり、例えば「ネットに自分の肖像が掲載された場合は保護者に伝え、情報が流れたメディアに削除要請をする」といった実践的なアドバイスが印象的であった。

授業内では、「発問→挙手→指名→発言」という形式での生徒の活動が6回ほどあり、積極的な参加が促されていた。動画は2種類使用され、いずれも授業担当者が選定したものであり、授業内容・目標に照らし合わせ非常に効果的な教材であった。

授業担当教員によると、印象に残る授業となるよう詳細に研究を重ねて構成しており、テーマによってはパソコンを使った発表やグループワークを取り入れることもあるとのことであった。



教室と座席の様子



教科書の該当ページと予習プリントの貼ってあるノートが授業を通して開いた状態であった

(2) 高1 Geography

※2コマ連続（45分×2）の後半部分の生徒の発表準備場面を見学

本授業は、高校生32名を対象に実施された。うち4名が欠席しており、教室内で作業を行っていた生徒は23名、廊下で作業していた生徒は5名であった。生徒は2～3人のグループに分かれ、横並びで着席していた。教室には、どの席からでもノートパソコンの電源を確保できる環境が整備されていた。

机上にはノートパソコン（ThinkPad）が配置されており、1～2割の生徒は地図帳を併用していた。課題内容はプリントに記載されており、それをもとに各自が作業を進めていた。グループ内では、テーマに対して共同で取り組む、あるいは分担して作業する姿が見られた。

課題の内容は、グローバルな環境の変化を理解し、それが特定の地域に与える影響を分析するものであった。分析にあたっては、写真・グラフ・資料などの視覚的情報を活用し、持続可能な開発を意識したうえで、課題に対する解決方法を発表することが求められていた。

見学した授業は、8月18日から9月18日の期間に「環境・リスク」をテーマとして実施されており、週5回（各45分）の授業時間を、担当教員の判断により90分×2回と45分×1回に再編して運用しているとのことであった。

授業の最後の5分間には、担当教員が各グループに紙を配布し、生徒は自分の名前と設定した地域を記入して提出した。次週の授業では、90分間を使って発表と質疑応答を行う予定の提示がされていた。

見学をした授業時間中にPCゲームをしてしまう生徒も見受けられた。ICTに関する課題については、学校・保護者・自治体も認識しており、他の視察先でも同様の指摘があった。授業担当教員によれば、座学の際には講義を丁寧に行っており、単なる知識の羅列ではなく、ストーリー性を持たせて心に残るような構成を意識しているとのことである。また、高校生になると生徒が意見を述べる機会が減る傾向があるため、どのような問い合わせを行うかが授業設計上の課題であると述べていた。



どの座席からも電源にアクセス可能



小グループで発表準備

(3) 高2 Math

本授業は、35名の生徒を対象に実施された。教室内の座席配置は横8列であり、通路を挟んで「2列・4列・2列」の構成となっていた。机上にはノートパソコン（ThinkPad）、A4ノート、筆記具が用意されていた。

フィンランドの高校の数学の授業は、通常習熟度に応じて「ロング」「ショート」に分けられる。しかし、見学した学校は数学に特色があるため「エクストラロング」「ロング」に分けられており。見学した授業は「ロング」レベルのものであった。生徒の主な属性は高校2年生であったが、1名の高校3年生がTA（ティーチング・アシスタント）的な役割を担って参加していた。また、フランス留学を控えた生徒が教室の隅で個別に数学の学習をしており、担当教員の許可のもと、個に応じた支援が行われていた。

授業は、生徒各自の進度や理解度に応じた問題を解き進める形式で進行していた。問題はすべてPC上で閲覧され、生徒は自分のレベルに合った課題を紙のノートを用いて解いていた。質問がある場合は挙手し、担当教員が個別に対応している様子が多く見られた。

日本の数学教育の観点から見ると、本授業には中学校レベルから大学入試レベルまでの幅広い学力層が含まれていたと考えられる。授業担当教員によれば、PCの利用は3D图形の表現などには適しているが、内容の定着には紙と鉛筆を用いることが有効であるとの認識を示していた。紙の教科書は使用されておらず、フィンランドの高校数学では基本的にデジタル教科書が用いられているとのことである。教室内にはクラシック音楽が流れしており、これは集中力向上に関する調査結果に基づくものであるとのことだった。生徒によっては、自分の好きな音楽を聞くことも許可されていた。

見学した授業は各自が問題を解くスタイルであったが、単元の開始時の授業では、教員による講義を丁寧に行っているようである。



教室全体



机上の様子

4 おわりに

授業スキルについて、画一的に用いるものではなく、教授内容に応じ「どのように教えるか」をそれぞれの教員が熟考して授業をつくることの大切さを感じた。紙面（教科書、ノート、プリント）利用の有用性について改めて考える機会となり、この経験を日々の授業実践に生かしていきたい。